

「ドリーム」

山口優

ついにこの装置を手に入れた。あたしはあたしの二ヶ月のバイト代をはたいて買った、カチューシャのような装置を手取る。あいつはまだ帰ってこない。だが、見ていろ。あたしは今日、あんたの本心を見抜いてやる。人の本当の心は夢に現れるという。あの浮気者の本音を、今日こそ確かめてやるのだ。と、思ってるうちに、ガチャガチャとカギを開ける音がする。

「美保ー。ただいまー」

調子のいい声で、あいつがあたしを呼んでいる。あたしは秘密の企みに高揚する感情をおさえ、何気ない表情を作ってアパートの玄関へ行く。

「おかえりー。絢けん、今日も遅かったねー」

絢はあたしに曖昧な笑みを作った。

「バイトの後輩がハマやってさ、その尻ぬぐいさ。めんどくせーけど仕方ないし」
あたしに同意を求めるように肩をすくめてみせる。

「はは。仕方ないよね。後輩って女の子？」

「まあな。でも色気の欠片もねーし。美保には全然かなわねーよ」

妙に優しい声音で、あたしの頭を撫でたりなんかする。こいつが妙に優しい時はヤバイ。あたしは長年の勘で知っているのだ。

「お風呂沸いてるよ。入る？ ビールもあるし」

絢は夕ご飯はいつも、バイトの賄いですます。

「なんだ、今日はえらく気がきくじゃん。じゃ、遠慮無く入らせてもらうか。疲れちゃつてさ」

「おつかれさま。ゆっくり入って」

あたしは笑顔で答える。

「サンキュ。一緒に入る？」

「ごめん。もう入っちゃった」

絢はあからさまに残念そうな顔だが、装置の準備があるのだ。

絢が調子よく鼻歌なんかを歌っている間に、あたしは装置の取説と格闘しながら、セツトアップを終えた。

取説の小難しい説明によると、この装置は人間が見た物と、その物を見た時の脳の血流の反応の対応関係から、夢で見た物を推定し映像化するという。かつては個人差があ

ると信じられてきたが、どのような物に対しても、親しい人間の名前以外は人間の反応はそう変わることはない、という事実が判明して、こういう装置も商業化できるようになった、らしい。

そんな説明、取説には不要だよ、まったく。読んで損した。あたしは心の中で悪態をつきつつ、その後に書かれていることを斜め読みして設定を終えた。

斜め読みした部分には、「その人物と親しい人間については……その名前を呼んでるときに登録する……」みたいなことが書いてあった。登録ボタンは装置をみれば分かったので、これで使い方は完璧。

絢がお風呂場から出てくる。

「なあ、美保、ビールって冷蔵庫の中？」

勝手にごそごそ冷蔵庫の中をさぐって、ビールを取り出す。冬はこたつになるちやぶ台にあぐらをかいて、ごくごく飲み始めた。風呂にビール……。被験者が早く寝付けるように、今日はしっかりと準備してきたのだ……。

「絢、おっさん化がすすんでるよー」

あたしは絢の隣に座って、にこにこした表情をつくって言い、隙をついて絢の、まだちよっと濡れた頭に装置を装着した。

「おいおい、何だよこれ」

当然の反応だが、既に酔っているのかそれ以上は追求しない。

「へへ。絢のおっさん化をかわいさでカバー。猫耳カチューシャだよ」

装置には、下手な手作りの猫耳をつけてある。偽装工作は完璧だ。あとはデータ入力。「にあわねえよそんなの」などと呟く絢に、そつとささやく。

「ね、あたしの名前を呼んで」

「はあ？ 今日の美保、ちよつと変だぞ。まるで真奈……あ、後輩なんだけどさ。そいつみたい。あいつもいつもおかしいことばかり言って……」

スイッチ・オン。あたしは、絢が「美保」「真奈」と言った瞬間に、それぞれスイッチを押した。そして二つの単語を固有名詞として登録する。

翌朝。

あたしの実験は成功した……かにみえた。確かに、絢の夢のデータはとったのだ。けれど、その結果を見て、あたしは絶望しつつあった。携帯でこっそり再生しているムービー。絢は真摯な顔で、一人の女の子の前に立っている。彼女の両肩に手を置いて、彼は言う。「真奈。好きだ。結婚してくれ」

真奈って、後輩の女の子の名前だ……。彼女と結婚する？ それが彼の本心なの……。

「よお。美保、もう起きてたのか……」

起き出してきた絢を、きつと睨む。わなわなと震える手で、再生されるムービーを見せつける。

「これ、どういうことよ」

絢はぼんやりした目でそれを見つめ、徐々に、事態を理解していった。

「それ、新発売の」

「夢を再生する装置。それで録画した画像よ。絢の昨日の夢」

絢は一步、二歩あとずさる。そして、あたしが昨日放り出した取説を手に取った。

「今更何のつもり？」

あたしは詰問する。

「あ、あのさ……。これ、見てくれ」

絢が差し出し、指さした取説の文章を見る。

「親しい人を登録するときは、その人の名を呼び、そのときに登録ボタンを押してください。但し、一秒か二秒のタイムラグがあります」

「人の脳は、普通に考えられているのとは逆に、ある言葉を発したあと、その言葉についてイメージを思い浮かべることが殆どです。つまり、ある言葉を発した後、一〜二

秒間ぐらいは、別の言葉を発していても、脳の中のイメージは先に発した言葉に同調して「います」

あたしは、そこに書かれていることを頭の中で整理した。つまり、絢が夢の中で「真奈」と呼んでいたのは……。あたしは、顔を真っ赤にした。